第 24 回 INAF 研究会のご案内

（アジア政経学会 2024 年次大会 INAF セッション）

The 24th Institute for Northeast Asian Futures Seminar
主催：一般社団法人・東北亜未来構想研究所（INAF）

統一テーマ：
戦後台湾のトップ・リーダーたちの対日認識と政策：国民党を中心に

日時：2024 年 6 月 15 日（土）10:00～12:00
司会：李　鋼哲　東北亜未来構想研究所(INAF)所長

報告者 1：段　瑞聡（慶應義塾大学教授）
タイトル：**佐藤栄作の台湾訪問と蔣介石の対応**

報告者 2：陳　柏宇（新潟県立大学准教授）
タイトル：**李登輝の対日観におけるアジア主義の考察**

報告者 3：深　串徹（島根県立大学准教授）
タイトル：**馬英九の外交思想と対日政策**

討論者：武藤秀太郎（新潟大学教授）；深町英夫（中央大学教授）

Zoom URL:
https://hokuriku-u-ac-jp.zoom.us/j/3603001872?pwd=cTJIbE1kUElNeVZsUXE0S3R6R3gwdz09
ミーティング ID: 360 300 1872
パスコード: 1A9XFj
参加費無料。INAF の HP：http://inaf.or.jp/にて関連情報の詳細が確認できます。
INAF メンバー以外の方は、1 日前までに参加申し込み（名前、所属、連絡先メールアド）を下記のメールアドまでに送ってください。なお、参加された方は INAF フレンドとして ML に登録し、今後の研究会の情報発信をさせていただきます。情報発信が要らないという方は、メールにその旨をお伝えください。
E-mail: kklichard@gmail.com

分科会要旨

2024 年の大統領選挙で民進党政権が三期を続けることになった。日本では「台湾=本省人＝民進党」というイメージが強まると考えられる。しかし、民進党政権による親日台湾のみで、日台関係を理解するには不十分であることが明らかである。日台関係においては、日本と「中華民国」、日本と「台湾」という二重性が、すでに先行研究に指摘されている。逆に言えば、台湾から見る日本も、その二重性があると考えられる。具体的に言えば、「中華民国」を主体とする視点と「台湾」を主体とする視点である。

本分科会は、戦後台湾のトップ・リーダー、とりわけ中国人アイデンティティが強い国民党の指導者らの対日観を、時代ごとに明らかにし、今日の日台関係に対する示唆を考察する。本分科会は三つの報告により構成され、蒋介石、李登輝、馬英九を研究対象とし、それぞれの指導者の対日観を分析するものである。段の報告では、佐藤栄作の台湾訪問と蔣介石の対応から蒋介石の対日観を分析する。佐藤の台湾訪問の目的や意義、蔣介石や国府の対応について考察し、蔣介石の対日認識を明らかにする。陳の報告では、アジア主義の観点から大統領任期中の李登輝の対日観を分析する。李登輝政権は国民党政権でありながら、2000 年以降の国民党は「親中」、民進党は「親米」と思われる二項対立的認識とは異なり、独自の外交路線と主張した。李は日本と台湾の連携を願い、日本が自信喪失からの脱却を志し、アジアのリーダーシップを取るべきだと主張した。深串の報告では、馬英九の外交思想は対外問題に関する「法律家的・道徳家的アプローチ」と、「中華民国ナショナリズム」の二つによって特徴づけられるものであったことを指摘する。

戦後台湾指導者の対日観に関する研究が不足している中、本分科会は今後の研究の足がかりとなることを目指している。

佐藤栄作の台湾訪問と蔣介石の対応

段　瑞聡（慶應義塾大学）

1967 年 9 月に、佐藤栄作は日本の総理大臣として台湾に公式訪問した。これまでの研究では、佐藤の台湾訪問は主に沖縄返還と対台湾円借款に焦点が当てられており、その全体像がいまだ解明されていない。近年、日本外務省外交資料館、台湾外交部の関連文書、「蔣介石日記」などが公開されている。本報告では、それらの一次史料を用いて佐藤の台湾訪問の目的や意義、蔣介石や国府の対応について考察し、蔣介石の対日認識を明らかにする。このような研究は、1960 年代の日本と台湾の関係を理解するだけでなく、日中、米中、中ソ、両岸関係に関する理解を深めるためにも役立つと考えられる。

佐藤栄作と蔣介石の会談記録を読むと、内容が多岐にわたることが分かる。具体的には、蔣介石のアメリカの対中政策への批判、中共政権の核兵器開発、文化大革命、中ソ関係に関する蔣介石の認識、日華協力による原子力の平和利用、日ソ関係、ベトナム戦争、

大陸反攻への蔣介石の期待などが含まれている。

会談記録には建前が含まれているかもしれないが、「蔣介石日記」と『佐藤栄作日記』はより本音が反映されていると考えられる。公式文書と日記を比較することで、蔣介石と佐藤栄作の相手側への認識や政治指導の特徴が明らかになる。

日本留学経験をもつ蔣介石にとって、明治維新を経て近代国家になった日本は学ぶべき手本である。しかし、日清戦争、とりわけ日中戦争を自ら経験した蔣介石にとっては、日本は百パーセント信頼できるパートナーではなかった。しかし、冷戦構造下で、大陸反攻を実現するために、蔣介石はアメリカと日本をはじめとする自由主義陣営の一員になろうとした。とはいえ、彼はアメリカに対しては批判的であった。そこには一貫して彼のアジア意識、反帝国主義意識があった。それは蔣介石の日本認識にも影響を及ぼしている。

李登輝の対日観におけるアジア主義の考察

陳　柏宇　（新潟県立大学）

1988 年に就任してから 2000 年に退任するまで、大統領任期中の李登輝は、国民党政権でありながら、2000 年以降の国民党は「親中」、民進党は「親米」と思われる二項対立的認識とは異なり、独自の外交路線と主張した。李登輝は台湾の主体性を強調し、「親日台湾」のイメージを打ち出す一方、国共内戦の対立構造からの脱却も試みた。本報告は、李登輝の外交路線には、日本が大きな役割を果たしている「アジア主義」を核心としていることを指摘したい。

中国国民党の「アジア主義」に関する議論は、孫文にまで遡る。孫文は、辛亥革命が起こる前に、日本のアジア主義者との親交があり、影響を受けている可能性がある。成立したばかりの「中華民国」と日本の連携を、アジア主義の考え方から模索していた。当時西洋の帝国主義が、アジア諸国を準植民地扱いし、アジア諸国が不平等な地位に置かれてしまった。孫文は、アジアのルネッサンスの出発点は日本だと論じた。日本が不平等条約を撤廃し自立を果たしたことは、アジア人が主人公となるだろうという希望を、アジア諸国に与えたからである。

李登輝は日本が先頭に位置し、アジア経済成長を引き起こす「雁行モデル」を強調する。アメリカと台湾の関係を重視するよりも、日本と台湾の連携を願い、日本が自信喪失からの脱却を志し、アジアのリーダーシップを取るべきだと主張した。李登輝はより日本を信頼し、アメリカへの態度が微妙である点は、ほかの台湾指導者と区別がつく。李登輝が考える「アジア主義」の背景には、日本教育を受けた経験と「京都学派」の哲学、特に西田幾多郎の影響が大きいと言えよう。

本報告では、李登輝の演説、インタビュー記録、著作、また中華民国の歴史編纂を目的とする国史館のアーカイブなどを分析し、李登輝の対日観におけるアジア主義の論理を明らかにする。

馬英九の外交思想と対日政策

深串　徹（島根県立大学）

本報告は、2008 年～2016 年に台湾の総統を務めた馬英九が、どのような外交思想に基づいて対日政策を展開したかを検討する。

「和中、友日、親米」を対外政策の主軸として掲げた馬英九政権は、任期中に日台間の実務関係を大きく進展させた。日本との関係を「特別なパートナーシップ」と位置づけ、経済や文化の交流を拡大させたほか、長年の懸案であった漁業問題についても、日台漁業取り決めの締結により日本側と一定の合意に達している。2011 年の東日本大震災発生後には台湾のテレビ番組に出演して、募金活動に参加したこともある。

それにもかかわらず、馬英九政権の対日政策をどのように評価するかについては、見解が分かれている。東日本大震災後に福島など一部の県産食品の輸入を禁止したことや、沖ノ島を岩礁と位置づけ、日本の排他的経済水域設定を否定したことなどから、馬英九政権は二期目に入り、対日強硬策に転じたとの解釈もある。台湾では総統が対外政策に大きな権限を有することから、学生時代に「保釣運動」に参加していた馬英九が、根本的には「反日的」な人物であったことに対日強硬策の理由を求める見方も存在する。

だが、政治指導者のある国に対する認識や政策は、「親〇〇的」「反〇〇的」といった態度のみに起因するものではなく、指導者個人の世界観、国際情勢認識、対外問題へのアプローチの傾向などの反映であると考えられる。本報告では、馬英九の演説、インタビュー記録、著作などを分析し、その外交思想を抽出した上で、馬英九政権の対日政策の内在的論理を明らかにする。結論として本報告は、馬英九の外交思想は対外問題に関する「法律家的・道徳家的アプローチ」と、「中華民国ナショナリズム」の二つによって特徴づけられるものであったことを指摘する。